

【書評】

## 多様な「ユダヤ人」と、その「物語り」の継承

——水島治郎著『隠れ家と広場：移民都市アムステルダムのユダヤ人』  
みすず書房 2023年6月、222頁、ISBN978-4622095583

筑波大学大学院 人間総合科学学術院人間総合科学研究群  
芸術学学位プログラム 博士後期課程

堀 咲子

### はじめに

本書タイトルのキーワードである「隠れ家」、およびサブタイトルの「アムステルダム」「ユダヤ人」から一般にまず連想されるのは、『アンネの日記』で知られるアンネ・フランクであろう。著者は、オランダの現代史研究家フェルフェン（Rian Verhoeven）著作の共訳『アンネ・フランクはひとりじゃなかった：アムステルダムの小さな広場 1933-1945』（みすず書房、2022年）を出版しており、アンネとその周囲の少女たち、そして当時のオランダ人住民たちの実録を日本に紹介している。日本でもよく知られているように、アンネはドイツ在住のユダヤ人家庭に生を受けたが、ナチス台頭後、危険を察知した父親の機転により家族でオランダに避難した。やがてオランダがナチスに占領されると、ユダヤ人は公園や映画館をはじめとする公共施設・公立学校から締め出され、さらに職を剥奪されていく。

1942年初頭、ヴァンゼー会議にてユダヤ人問題の「最終的解決」が可決されたことで、オランダのユダヤ人にも次々と「ドイツにおける労働」を命じる呼び出し状が届くようになる。同年7月、アンネの姉であるマルゴーに呼び出し状が来たのをきっかけに、フランク一家は「隠れ家」に避難した。しかし、1944年8月、突如訪れたゲシュタポによって一家は連行され、アンネは不衛生かつ劣悪な強制収容所でチフスにかかり絶命した。フランク一家および共に潜伏生活を送ったファン・ペルス一家と歯科医のプフェファーが迎えた展開について

は前年の共訳に詳しいが、本書でも解説されているように、一般にはホロコーストの犠牲となったユダヤ人を代表するかのよう認識されているアンネとその家族の経緯は、全体からいえばむしろレアケースであった。

本書は、民族や宗教をめぐるオランダが「寛容の国」と呼ばれた歴史的経緯、政治体制、社会制度も詳細に紹介している。戦中オランダ、とりわけアムステルダムに生きた「ユダヤ人」とは、如何なる人々であったのか。

## 1. 構成と概要

本書は、2020年10月から2022年8月にかけて雑誌『みすず』に連載された「〈隠れ家と広場〉からみた移民都市アムステルダムのユダヤ人」シリーズ(全10回)を中心とした著者の論稿が全13章に再編されている。内容を各章ごとに分析すると、次の2つに分類することができる。

### ①オランダ史の客観的な概説 序章：「隠れ家」と「広場」

2章：「寛容の国」オランダ共和国の光と影

5章：「涙の館」、オランダ劇場にて

12章：戦後補償と歴史認識の新展開

### ②ある個人・団体を基軸としたオランダ史の解説

3章：19世紀アムステルダム、都市改革の夢—サルファーティの「約束の地」

4章：メルウェーデ広場の青春—広場の少女アンネ

6章：保育士たちのレジスタンス

7章：学生たちのレジスタンス—大時計の下で

8章：カルマイヤーのリスト—法律家たちのレジスタンス

9章：オードリー・ヘプバーンとアンネ・フランク—魂の邂逅

10章：隠れ家、その後—アンネと仲間たちの「命のバトン」

11章：終戦と解放—『アンネの日記』が刊行されるまで

終章：明日もきっと、元気でね—トークショーの女王、ソイヤ・バーレント  
あとがきで著者が述べているように、本書はアムステルダムのユダヤ人の織りなしてきた歴史に光を当て、その現代につづくインパクトを意識しつつ、と

くに人物を軸として論じられている。その際、とりわけ「隠れ家と広場」というアムステルダム独特の都市空間の存在に注目されている。

目次の後には、各章で言及されるアムステルダムの要所を押さえた地図がある。本書を読み進めながら必要に応じてこの地図を確認することができ、現地の土地勘がない読者にも位置関係を把握しやすい。また、各章では歴史資料のほか、オランダ政治史を専門とする著者自らが現地で撮影した写真の数々も掲載されている。

序章では、本書のタイトルでもあり叙述の補助線でもある「隠れ家」と「広場」について、アムステルダムというユニークな空間の歴史的経緯を踏まえながら紹介されている。本書は、前述のフェルーフエンの著作のように、フランク一家とその隣人たちが居住していたメルウェーデ広場が主題とはされていないが、全体を通してアンネがひとつの基軸になっている。アンネについては第4章でフェルーフエン著作の要点を中心に紹介されており、第6章を除いたすべての章でアンネが置かれた状況への言及や比喩がある。一般によく知られたアンネとの対比によって、日本では知られざる当時の様々なオランダの記録が日本語で紹介されており、戦前・戦中オランダを学ぶのに最適の一冊である。

著者が折に触れて言及しているように、『アンネの日記』と、隠れ家で過ごしたユダヤ人を献身的に支えたオランダ人協力者のイメージは、とくに戦中のオランダやオランダ人全般、そしてオランダに留まり潜伏生活を送ったユダヤ人たちの状況をあたかも代表するかのような印象を世界中に与えた。周知のように、ナチスによるユダヤ人の最終的解決（絶滅計画）から身を挺してユダヤ人を護った非ユダヤ人に対してイスラエルのヤド・ヴァシェム（ホロコースト記念館）より顕彰される「諸国民のなかの正義の人」は、ポーランド人に次いでオランダ人が多い。

しかし、その一方で、本書で触れられている通り、オランダでは戦前におけるユダヤ人住民の7割を超える人々（10万4000人）がホロコーストの犠牲になっており、これはベルギーやフランスにおけるユダヤ人犠牲者と比較して圧

倒的に比率が高い。このユダヤ人迫害に対するオランダ社会の責任をめぐる論争は現在に至って続いており、今後も調査研究が進められることが期待される。

第5～7章では、激化するユダヤ人狩りと、ユダヤ人救出に奔走する様々な立場のレジスタンスによる具体的活動が紹介されている。強制収容所に送られる目前にあったユダヤ人の救出と潜伏への手助けを行ったレジスタンスは、大人よりも主に子どもたちを対象として動いていた。親から引き離されて潜伏生活に入る子どもたちのほうが圧倒的に多く、父母と娘2人の4人家族が揃って長期潜伏していたフランク一家は例外的であった。

加えて、本書ではオランダに生きたユダヤ人、および彼らと様々な形で所縁のある人物の「物語り」も紹介されている。「光と影」の画家として知られるレンブラントは、アムステルダムにユダヤ人が流入していた17世紀にユダヤ人が多く居住する地区で長年活動していたため、作品にもその影響が見受けられると著者は分析している。また、アムステルダムを真の首都たらしめた人物と称えられ、著者が「アムステルダムの渋沢栄一」と評するサムエル・サルファァーティの活躍、銀幕のハリウッドスターであったオードリー・ヘップバーンとアンネとの意外な繋がり、戦後オランダのお茶の間で大人気の司会者であったソニヤ・バーレントが抱えていた「事実は小説より奇なり」を彷彿とさせる両親の謎など、それぞれの貴重な「物語り」は是非本書を手にとって読みたい。

本書で取りあげられたひとつひとつの「物語り」を通じて、「寛容」で知られたオランダで生じた多数のホロコースト犠牲者という「逆説」を意識しながら、運命の分かれ道に立たされた様々なユダヤ人の素顔を知ることができる。

## 2. 多様な「ユダヤ人」とナチス占領下での状況

大戦間のアムステルダムでは、16世紀末にイベリア半島を追われたポルトガル系ユダヤ人＝セファルディムと、1630年以降、30年戦争で混乱したドイツ、リトアニア、ポーランドから渡ってきたユダヤ人＝アシュケナージムが共存していた。両者は個別の共同体を構成しており、言語（前者は主にポルトガル語、後者はイディッシュ語）をはじめ、文化や習慣も大きく異なっていた。本書で

解説されているそれぞれの歴史的経緯のなかでも、とりわけセファルディムの移民2世であった哲学者スピノザをめぐる境遇は興味深い。

ポルトガル商人の流れを引き、西欧からブラジルに至る国際商業ネットワークを持つセファルディムはアムステルダムの経済発展に重要な役割を果たした。17世紀以降、彼らの存在感が増すにつれてユダヤ教の信仰実践が段階的に許容されるようになり、ホラント州議会によってユダヤ人はオランダ市民であることが法的に位置づけられ、シナゴグ建設も認められるようになる。セファルディムとは対照的にアシュケナージムは貧困層の割合が高かったが、彼らは独自にユダヤ教の指導者であるラビを任命してシナゴグを建設した。本書で具体的に取りあげられているセファルディムは、スピノザをはじめ、アムステルダムの出版業者の代表格となったメナセ・ベン・イスラエル、第3章の主題であるサムエル・サルファーティ、フランク一家が居住していたメルウェーデ広場で食料品店を営んでいたカルドーフ夫妻などである。

占領後の1941年1月、占領当局により、オランダのユダヤ人は、ユダヤ人である祖父母の人数によって「完全ユダヤ人」「2分の1ユダヤ人」「4分の1ユダヤ人」が選別され、完全ユダヤ人は強制収容所に送られるようになった。この認定を審査する責任者を務めたのが、本書の第8章で取りあげられているドイツ人法務官ハンス・カルマイヤーである。偽造の証明書を用意してでも再審査を求めるユダヤ人が後を絶たず、再審査の請求が受理された者はいったん「カルマイヤーのリスト」に名前が掲載された。このリストに名前があれば、少なくとも審査結果が出るまで強制収容所への移送を保留されたため、「カルマイヤーのリスト」は移送に怯えるユダヤ人たちの間で頼みの綱となっていた。戦後、カルマイヤーは「諸国民のなかの正義の人」としてイスラエルから表彰されているほど、彼を通じて命を救われたユダヤ人は多数存在する。

しかし、その一方、1943年10月以降の動向には明らかに不可解なものが増えていることから、カルマイヤーの評価は2020年代になった今なお大きく分かれている。本書の著者も、「カルマイヤーを一方向的に英雄視する扱いはバランスを欠いている、という主張には根拠がある」と評している。前述のとおり、セ

フェルディムは数世紀にわたってアムステルダムでの国際貿易に従事し、繁栄する商業セクターを支えてきた経緯がある。彼らは当初よりオランダ市民および住民として法的に認められてきたこともあり、カルマイヤーによって「完全ユダヤ人」としての選別を保留されて強制収容所への移送を免れていた。

一方、アンネをはじめとする多くのユダヤ人は、1942年7月に強制収容所への移送が本格化したことで家族の一員に「ドイツにおける労働」への呼び出し状が届き、身の危険を感じて潜伏生活を開始している。1942年以降、ユダヤ人は片っ端から「涙の館」ことオランダ劇場を通してウェステルボルク通過収容所に連行され、さらに東方へと送られて、ほとんどは戻らなかった。続いて、本書によれば、1944年1月、ナチス当局によりセフェルディムも「完全ユダヤ人」に再選別されることになり、オランダのユダヤ人は一斉に強制収容所へ送られることになった。突如連行された人として具体的に紹介されているのは、メルウェーデ広場で人気のあった食料品店の経営者、カルドーゾ夫妻である。

ところで、この「カルマイヤーのリスト」を読んだことで思い出された、占領下のオランダに生きたポルトガル系ユダヤ人がある。本書では取りあげられていないが、日本との縁があるためここで紹介したい。

世界がコロナ禍に見舞われる直前の2019年から翌年にかけて、版画家メスキータ（Samuel Jessurun de Mesquita, 1868–1944）の回顧展が日本で初めて開催された。アムステルダムにてセフェルディムの家庭に生を受けたメスキータは、日本の教科書にも掲載される「だまし絵」の作者として著名なエッシャー（Maurits Cornelis Escher, 1898–1972）の師でもある。同展のカタログには、監修を務めた美術史家の佐川美智子による「版画家としてのメスキータ紹介」をはじめ、弟子のエッシャーほか日本国内外の研究者によるメスキータ解説が豊富な図版とともに掲載されている。

これにより、同時代の欧州における美術家のなかでのメスキータの位置づけや、日本の鎖国時代を通じて唯一、欧州の窓口であったオランダの歴史的背景がメスキータの作風に与えた影響等、オランダのジャポニズムをめぐる興味深い情報を得ることができる。同展は既に開催終了しているが、メスキータの生

涯と作品については是非カタログを参照されたい。

カタログの解説によれば、かねてよりメスキータの友人たちは潜伏することを勧めていたが、一家は1944年の年明けまでアムステルダムの自宅に身を置いていた。同年1月末、あるいは2月1日に突然押し入ってきたゲシュタポによってメスキータと家族は連行された。メスキータ夫妻はアウシュヴィッツ強制収容所のガス室に送られて殺害され、息子はテレージエンシュタットのゲトトで絶命している。私物が荒らされたメスキータの自宅の床に散乱した版画を持てる限り持ち出して保護した人物のひとりが弟子のエッシャーである。日本初のメスキータ回顧展開催にあたり、個人としては最大規模のメスキータ作品を収蔵するドイツの蒐集家からコレクションが借用された。現地に幾度も足を運び交渉にあたった佐川によれば、ナチスのユダヤ人迫害に対する贖罪の意識から、遺されたユダヤ人画家の作品保護に努めるドイツの蒐集家も少なくないとの事である。

なお、カタログではカルマイヤーについて触れられていないものの、本書を通じて、セファルディムであったメスキータ一家もユダヤ人認定をめぐって再審査請求を提出し、1944年1月まで「カルマイヤーのリスト」に掲載されていたことが推測できる。

### 3. オランダに逃れたドイツ系ユダヤ人の境遇

本書でも紹介されている、かつてのアムステルダムのメルウェーデ広場で地域住民から「三人娘」と呼ばれて親しまれていたアンネ、ハンネリ (Hannah Elisabeth Pick-Goslar, 1928–2022)、サンネ (Susanne Ledermann, 1928–1943) はいずれもオランダに逃れたドイツ系ユダヤ人の子弟である。アンネと家族が移り住んだ1930年初頭のアムステルダムでは、セファルディムとアシュケナージムの貧富の差はあってもユダヤ人たちが平和裏に暮らしていた。

アンネといえば、一般には「隠れ家の少女」という印象が強いが、冒頭で紹介した訳書『アンネ・フランクはひとりじゃなかった：アムステルダムの小さな広場 1933-1945』のタイトルからも読み取れるように、彼女はオランダがナ

チスによって占領されるまで、メルウェーデ広場で友人たちに囲まれて少女らしい青春を謳歌していたのである。メルウェーデ広場をめぐるユダヤ人コミュニティに関しては前述の共訳が最も詳しいが、本書の第4章を読むだけでも、アンネの印象は活き活きとした「広場の少女」に変わるであろう。なお、「三人娘」のうち、強制収容所から生還したのはハンネリだけであり、サンネはアウシュヴィッツに連行されて到着した当日に両親と共に殺害された。

ナチス台頭後、ドイツ隣国の中立国オランダに目を向けたドイツ系ユダヤ人は少なくなかった。とりわけ歴史的にユダヤ人が住民として受け入れられてきたアムステルダムでは、ドイツで窮状に陥った同胞を救済しようとする動きがあり、難を逃れたユダヤ人が再スタートを切るうえで好都合な都市と思われる十分な理由があったのである。

本書では触れられていないが、オランダに逃れたドイツ系ユダヤ人のなかで日本と深い関わりのあった人物のひとりが、日本美術商フェリックス・ティコティン (Felix Tikotin, 1893–1986) である。ティコティンとアンネに共通するのは、ナチスが政権を獲得した1933年以降にアムステルダムに逃れたこと、そして1942年夏に家族で潜伏生活に入った点である。一方、フランク一家とは違い、ティコティンの幼い娘2人はオランダの農村部でオランダ人協力者のもと終戦まで過ごしている。娘たちは父母の潜伏先とは別の場所に匿われていたため、終戦時には実母を認識できないまでになっていた。ここでも、家族全員が揃って潜伏していたフランク一家の特殊性をみることができる。

また、「三人娘」のひとりであるサンネの父方の従兄妹にあたるハインツ・ケンプファー (Heinz Martin Kaempfer, 1904–1986) もまたナチス台頭後にオランダへ逃れたドイツ系ユダヤ人である。ケンプファーは潜伏生活を経て、戦後はオランダ史上初の日本美術を専門に扱う学術機関である日本版画工芸美術協会 (Vereeniging voor Japansche Grafiek en Kleinkunst, 現 Society for Japanese Art) の第4代会長および顧問を務め、ティコティンと共に同協会の終身名誉会員となった。その後、日本美術研究および出版の助成のためのケンプファー基金が立ち上げられたことで、ケンプファーは歿後も現在に至って日

本美術研究の発展に貢献している。

このように、オランダにおける日本美術研究機関も、意外な形でアンネとの繋がりがあることがわかる。ティコティンと妻エファはドイツ語が母語であったが、戦後オランダでは公の場でドイツ語を話すことが憚られた。オランダで学校教育を受けた娘たちとは違い、成人するまでドイツ語環境で生きてきたティコティン夫妻は肩身の狭い思いもしたという。ティコティン一家は日本美術コレクションと共にオランダを離れてイスラエルに移住し、自らのコレクションをもって中東で唯一の日本美術館を開いた。戦後、イスラエルに移住したドイツ語を母語とするユダヤ人は少なくなく、イスラエルでは公共の場で堂々とドイツ語で会話をすることができたという。

なお、戦後は『アンネの日記』の公刊に尽力したアンネの父オットーは、実母がスイスのバーゼル在住であったことからアムステルダムを離れてスイスに移住した。また、強制収容所から生還したハンネリと妹は孤児となったため、オットーの助けを得て叔父のいるスイスに渡ったが、その後はイスラエルに移住している。

本書の第12章で紹介されているアムステルダムのホロコースト犠牲者名記念碑には、アンネ・フランクをはじめ、姉マルゴー、母エーディト、隠れ家でアンネの恋人であったペーターほか、犠牲となった人々の名が刻まれている。ここに、ティコティンの妻エファの名はない。ティコティン一家は潜伏を経てオランダ解放まで生き延びているからだ。終戦後、ティコティン夫妻は、強制収容所から戻ってきたユダヤ人たちの一時滞在所として自宅を開放した。しかし、身寄りのなくなった満身創痍の人々や、骨と皮のようになった孤児たちを献身的に世話していたエファは精神疾患を発症し、イスラエルに渡った後の晩年まで入退院を繰り返すようになる。終戦後に生まれた3女は若くして自殺し、精神状態が悪化していたエファも数年後に自殺した。ホロコーストがエファにもたらしたものと、この母子の自殺に因果関係がないとは言えないだろう。オランダ解放まで生き延びた「ユダヤ人」の境遇と、その後起こった展開も一樣ではない。

#### 4. 歴史認識と戦後補償

2020年1月26日、アムステルダムで開催されたアウシュヴィッツ強制収容所解放75周年の追悼式典にて、マルク・リュテ首相がホロコーストへの加担をめぐるオランダ政府の過ちを初めて公式に認めた。本書の冒頭は、最後のタイミングにおける「最後のホロコースト生還者」へ向けられた、リュテ首相の公式謝罪のことばに始まる。

戦後しばらく、オランダにおける自己イメージは「ナチスに抗し、ユダヤ人を匿った」とするものが支配的であった。実際、オランダには数々の「ユダヤ人の護り手」がいたこと、多くのオランダ人がユダヤ人団体やイスラエルから謝意を示されていることも本書で紹介されている。しかし、1960年代以降、オランダのユダヤ人迫害に関する研究調査が進み、1990年代になるとスイスの銀行に残されたユダヤ人資産をめぐる問題が国際的に注目されるようになった。第12章では再燃する補償問題とオランダにおける実際の動き、最新の研究動向が取りあげられ、冒頭で敷かれた伏線が回収されている。

とりわけ、2019年にオランダ最大の鉄道会社であるオランダ鉄道がホロコーストの生存者や遺族に向けて個人補償を行うことにした経緯が紹介されている。占領下において、オランダ鉄道は占領当局に全面的に協力し、11万にのぼる人々を東方へ移送したことで収益を上げていた。最終的に、オランダ鉄道は「歴史のなかの暗黒のページ」としてこの事実を認め、個人補償の開始を発表した。

著者は、オランダにおいてユダヤ人迫害の諸相をめぐる記憶の継承と研究、報道が現在も進行していることに大きな意義があると述べている。ジャーナリスト、研究者、編集者、それぞれが専門家としての役割を自覚し、過去と正面から向き合うことの重要性について、日本も大いに学ぶところがあるだろう。

おわりに

本書では、解放後のオランダにおいて、戦中にドイツ兵と昵懇になった女性が痛烈に糾弾されたことに触れられている。前述のフェルワーフェン著作の訳

書でも、占領された5年間にわたる積もりにも積もった怒りを炸裂させた住民たちにより、ドイツ兵と深い仲にあったオランダ人女性が公開処刑された具体的な情景が綴られている。また、フランスでも「対ナチ協力者」とされた女性たちが解放直後の広場で頭髪を刈られ、頭頂部にハーケンクロイツを描かれる等の私的制裁が起っていた。フランスでタブー視されてきたこれらの女性たちをめぐる研究も徐々に進められている。

近年の報道によれば、かつての占領地オランダにて国家弁務官を務めたナチス高官、アルトゥル・ザイス＝インクヴァルトの孫にあたるヘルムートが、1987年にアンネ・フランク財団との協働を希望していた。ヘルムートの意図は、過去の話になりつつある祖父の過ちを語り継ぎ、人々に周知したいとの思いからであった。

しかし、オランダにいた何万人ものユダヤ人を強制収容所に送り込んで死に追いやり、1944年から翌年にかけて多数の犠牲者を生んだ「飢餓の冬」を招いた張本人が彼の祖父であったことは史実である。現在に至ってなお、オランダでザイス＝インクヴァルトという名は忌避されることもあり、ヘルムートの提案は拒否され、2020年まで財団に関わることを許されなかった。同記事には2021年当時のヘルムートへのインタビューが掲載されている。

これによれば、ヘルムートは「もし財団が何か具体的な企画を私に提案してくるか、私と対話しようとするなら、心から喜んで応じます。私は彼らに憤りを感じていません」と述べているが、管見の限りにおいて、その後も両者は関わっていない。ヘルムートが戦犯である祖父を支持することなく、完全否定する立場を取っていても、人の心情は論理的思考で整理できない部分もあるのは確かであり、非常に考えさせられる報道であった。

本書からも明らかなように、「ユダヤ人」を一括りにして語ることができないのと同様、現代のあらゆる地域に生きる先の大戦の遺族も、実に様々な形でそれぞれ傷を抱えている。今、ドイツに生きる「ドイツ人」のなかには、ナチス占領下のフランスにて、ドイツ人の父親とフランス人の母親のもとに生まれた最後の生き証人もいる。ホロコーストの犠牲となった人々の「物語り」がある

一方、私刑から子どもを守るためドイツに逃れてきたフランス人女性とその子どもたちの「物語り」も存在する。各地でひとつひとつの「物語り」が歴史を紡いでいくのと同時に、それぞれに受け継がれる負の遺産があり、今も世界各地で再び対立が起こっている。異なる「物語り」を受け継いだ人たちの対立を終わらせるのは、人類史上、不可能なのであろうか。

オランダにおけるユダヤ人の近現代史という、非常に複雑かつ扱いづらいテーマを見事にわかりやすくまとめた本書の最後は、ソンヤ・バーレントによる「明日もきっと、元気でね」という、人々の未来への希望が込められたメッセージで締めくくられている。

#### 【参考文献・メディア】

佐川美智子（監修）『メスキータ展図録』キュレーターズ、2019年。

リアン・フェルファーフェン（水島治郎・佐藤弘幸共訳）『アンネ・フランクはひとりじゃなかった：アムステルダム小さな広場 1933-1945』みすず書房、2022年。

藤森晶子『丸刈りにされた女たち：「ドイツ兵の恋人」の戦後を辿る旅』岩波現代全書、2016年。

堀咲子「The origins of the Dutch Society for Japanese Art: Focussing on the Bulletin and archives of the Society in its early years」『国際日本学』第21号、法政大学国際日本学研究所、2024年3月、121-145頁。

Borensztajn, J., *Tikotin - a life devoted to Japanese Art (film)*, Ruth films, Jerusalem 2013.

Van Mersbergen, C., 'Kleinzoon Seyss-Inquart verwerpt nazi-verleden opa: 'Hij werd erger tijdens zijn jaren in Nederland'', *Provinciale Zeeuwse Courant*, 16 Oct 2021, p. 7. Krantenbank Zeeland (ゼーラント州新聞データベース)

(ほり さきこ)

(2025年1月8日受理)